

平成26年度 入学宣誓式 学長告辞

本日ここに入学式を迎えられた 学部生678名、大学院博士前期課程476名、博士後期課程 37名のみなさんに対し、京都工芸繊維大学を代表し、心から歓迎の意を表します。新入生諸君をこれまで育ててこられたご家族始め関係者の方々に心からお喜び申し上げますとともに、皆さんの新しい力を迎え入れることができたことは、私たち京都工芸繊維大学にとって、誠に大きな喜びであります。

京都工芸繊維大学は、115年の歴史を誇る理工系大学であり、科学と芸術の融合を目指して教育研究活動を行っています。大学理念を大胆に簡略化すれば、知と美と技、そして学風の底流に流れる京の四文字に縮約することができます。我々はこのキーワードが指し示す方向に向かって大学活動を推進するため、3つの学域と博士前期課程においては12専攻、博士後期課程では6専攻を設置しています。今後さらに大学の個性と強みをのばしていくために教育組織の改組を断交するとともに、地勢的にも嵯峨地区の再整備や京都府北部日本海に面した京丹後市の活動拠点を拡大し、東京オフィスやフランスのパリ、タイのバンコクやチェンマイにも拠点を整備していく計画です。

京都工芸繊維大学は今まさに、君たちとともに、この松ヶ崎から世界に向かって新たな一步を踏み出そうとしています。

京都工芸繊維大学は、昨年秋に、文部科学省が全国立大学86校の中から選抜した12校のうちの一つに選ばれました。これは世界的な競争力をつけ、世界で戦える大学になれ、文部科学省も支援するぞ、という意味です。いわばオリンピック代表選手に選抜されたようなモノであり、何としてもメダルを取って世界に冠たる大学にならねばなりません。まさしく大学の名誉であり、誇りであり、こうした絶好の機会が得られたのも、本学の先輩や卒業生の努力と実績が認められたからであり、新入生諸君にもさらなる活躍を期待しているところです。

本学の学生は、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者として企業や社会から高い評価を得ています。したがって私たちは、皆さんの学習意欲や基礎的能力について、一点の疑いも持っていません。

ところで大学の活動は、教育・研究・社会貢献の3つの領域から構成されていますが、近年、社会貢献活動の重要性がますます大きくなってきています。

社会貢献はいわゆるボランティア活動を意味するモノではなく、COC、COI、COGの3つの旗印のもとに行われる活動を意味しています。COCとは、センターオブコミュニティの略で、大学は地域活性化の核たるべし、COIはセンターオブイノベーションの略で、大学はイノベーションの核となり産業界に寄与すべし、COGはセンターオブグローバルの意味で、国際競争力を増強し、世界で戦える大学になるべし、という意味です。

具体的には、COC事業の地域の核としての活動は、文部科学省の地の拠点事業に採択されたことをきっかけに、京都府と連携して北部5市2町に注力し、また京都市と連携して地域活性化を実施しています。COI事業では、文部科学省事業に採択された京都COIのサテライト拠点として、企業と共同して5つのイノベーション事業を社会実装できるように努めています。さらにCOG事業では、国際競争力を高めるために、ユニット招致を通じて海外の有力大学から、講座を丸ごと本学に招致し、共同教育や共同研究を展開します。逆に留学やインターンシップを活性化するために、海外有力校に拠点を整備し、学部4年次と修士課程を一体的に運用する方策を用いて、外国への学生派遣事業を増大する予定です。このように、京都工芸繊維大学は大胆な大学改革を断行し、限られた資源を有効活用して世界に冠たる大学になるために尽力して参ります。

本学はこのような高揚感に包まれ、意欲と勢いに満ちています。大学改革という大きな歴史の節目に入学された皆さんも、この雰囲気を感じ、大学の方向をよく見極め、我々が提供するさまざまなプログラムに積極的に参加していただき、自らを鍛えるためにも幅広い経験を積んでいただきたいと思います。

更にいえば、広い経験を積んで、大きな物語を語れる人材になっていただきたいと思います。世の風潮には、もはや大きな物語は終わりを告げ、小さな物語しか語れないといった、あきらめの気分が漂っています。しかし知的な強靭さを獲得するためには大きな物語を紡ぎ出せる力を養うことが必要です。このためには、専門知識のみならず、幅広い知識と教養が大切です。

教養とはなにか？ 教養とは、世に言う洗練された趣味やスノビズムを身につけることではありません。教養はむしろ実務的な能力であり、一つには専門家を使いこなせる総合的能力のことであり、専門家に適切な指示を与えて、望みの結果を導き出させるための強い指導力を指します。もう一つは、専門領域を離れて、大きな枠組みから専門性の意味をわかりやすく伝える能力を指します。こうした能力を養うには、大きな問題を念頭において、それに対する大きな回答を求めて勉学に集中することが有効だと考えます。

大学における勉学のおもしろさは、難しさと表裏一体のものです。我々の日常生活の延長線上にイメージできる事象はそれほど難しくはない。むしろ退屈です。大学では自分の常識では想像できないような事象に出会います。それを理解し、咀嚼して自らに取り込み、知的栄養素として血肉化すること。自分の器をはるかに超える想像もしていなかった事象や考え方に会ったとき、人は驚き、恐れをなして逃げ出したくなりますが、その恐怖感を超えて、それを自分に取り込みながら成長していくこと。ここに、大学の授業の難しさと同時に知的好奇心をかき立てるおもしろさがあります。

たとえば地球は丸く、自転しながら太陽の周りを回っているということは日常生活の中で想像することは難しい。また iPS 細胞のように、分化した細胞を初期化し、再び他の器官の細胞に分化させるというのは、とうてい信じられません。大学の活動は信じられない事象を発見し、証拠を積み上げて、信じられる事象として提示することです。

私たちは、通常、大きな問いに対して小さな答えしか持っていません。大学での勉学の見通しをよくするためには、先達の言葉を参考にして、大きな問いに対する大きな答えを知っておくことも有効です。

大きな問いとは何か？ たとえば数学とはなにか？ 宇宙は何でできているか？ そして人間は何でできているのか？ それに対する答えは何か？ たとえば、数学とは何かという問いかけに対して、山口昌哉先生は、つくづく思うに、数学とは「等号の学問」である、とっておられます。イコールですね。確かに、数学はギリシャ以来、図形と数式、幾何学という抽象化された図と数式という抽象化された言葉の同相性を求め続けて来た学問であります。

近代の集合論においては、カントールが人生をかけて示したように、無限集合では部分と全体の要素の多さが等しいことがある。自然数全体の多さとその部分集合である偶数の多さは同じになりますが、我々有限の世界に生きるモノには考えられない事柄であり、驚きと敬意を持ってこの等号を受け入れなければならないと思います。等号とは、異なるモノどうしを結びつける強力な記号であり、方程式を解くとは、未知のモノを機知のモノに置き換える作業に他ならない、こういった納得のあり方を大きな回答とって良いでしょう。

また人間は何でできているのか？人は水からできている。人はタンパク質からできている。確かに。いやいや人は繊維からできている。そうかもしれない。では人間の精神は何からできているか？人の心は言葉からできている。人の精神は言葉の網の目のように構造化されている。これはパリの精神科医ジャック・ラカンの言葉であり、象徴界の理論として知られているものです。彼は精神科医として、日々の患者の診療体験から、つくづく思うに人間の精神は言葉でできている、という結論に達したのであり、逆に言葉にならない体験や言葉を媒介としないコミュニケーションのあり方を考察し、想像界、現実界の理論を構築し、動物の中でも極めて特殊な動物である人間の特性を鋭く描き出しました。

このように、先達の言葉は、初見では常識外れのものであっても、人生をかけた考察から生み出されたモノ、あるいは論理的に突き詰めていった結果、それがいかに受け入れがたい結論であっても、そうとしか言いようがないのだという主張に対しては、耳を傾け、理解する努力を払い、驚きと敬意を持って受け入れることが大学での学習です。

また現実問題として学生諸君にあらかじめ知ってほしいことがあります。大学では教育だけでなく、研究が大切な活動領域です。だが一般に研究者の言葉は判りにくいのが特徴です。これを誤解してはいけません。研究内容が高度で難しすぎるために理解できないとか、研究者は教育に関心がないため教えるのが下手であり、授業が判りにくいとか、そういうことではないのです。そもそも研究者は既知の領域と未知の領域との境界線上に立っています。そして研究者は常に未知の領域を探検し、その結果を既知の領域に持ち帰ろうと努力しています。

研究とは知られざる領域を私たちが知っている領域に組み込もうとする活動であり、研究者は新たな発見を論文にして世界中の人々に贈り届けます。しかし、通常、研究者の日常は実験の失敗や証明の失敗の連続であり、ああでもない、こうでもない、という自問自答と、リベンジの繰り返しから構成されています。一般に教科書は成功事例を歴史の順に整理して配列しているため、失敗というものがなかなか実感できない。しかし、研究現場というものは、多くの失敗と遠くにある夢が混じりあった工場のようなものであり、研究者は現場監督であり、知識を体系的に整理し伝達する管理者ではない。研究者の言葉が判りにくい理由はそこにあるのであって、必ずしも学生の理解力のなさとは言えない。こうした大学の講義の持っているある種の宿命を前提にしていただければ、余裕を持って講義に臨み、理解が進むと期待されます。

大きな物語は正確に語ることは難しい。したがって、専門分野の知識と技能の習得に注力することは大切です。「神は細部に宿る」ということわざ通り、研究作業は細部にわたって厳密に行い、正確を期することが大切です。しかし、そうした細かな作業が何につながっているのか、最終的には自分は何を求めて研究をしているのか。時には自問自答し、時には友人や知人と議論を交わしながら、日々の細かな作業の意味を確認しながら研究を進めていただきたいと思います。

そして、日々の訓練を通じて、理解力、咀嚼力を鍛え、卒業後も新たな課題に挑戦し続けて行くだけの力を身につけていただきたいと思います。新入生の皆さんにとって、本学における教育、研究、社会における諸活動が実り多きモノとなりますように、卒業式の日には、再び笑顔でお会いできることを祈念しています。

平成26年4月7日
京都工芸繊維大学長
古山正雄